

エストニア語の動詞 *pruukima*「必要だ;用いる」の多義性(*) —コーパスと辞書の記述に基づく考察—

松村 一登

東京大学大学院人文社会系研究科
kmatsum@L.u-tokyo.ac.jp

1. エストニア語の辞書における記述

『エストニア語文語詳解辞典』(Eesti kirjakeele seletussõnaraamat; 以下『詳解辞典』と略す)では、動詞 *pruukima* の語義・用法は、次のように大きく2つに分けられている。用例は、辞書のものを1つずつ選んで示す。この辞書の用例には [EKS]【注1】を付す。

1. 必要だ, する価値がある (*tarvitsema, vaja olema, pidama; mõtet olema*)
2. (一部, 古風:) [いつも]使う, 用いる ((*osalt vananemas:*) (*regulaarselt*) *kasutama, tarvitama*)
 - a. 主に飲食物 (*peam. söögi-joogi kohta*)
 - b. 各種の道具, 材料など (*mitmesuguste vahendite, materjalide jms. kohta*).
 - c. 口頭の, または書いた表現 (*ühenduses suulise v. kirjaliku väljendusega*)
 - d. 抽象的なもの (*millegi abstraktsemaga seoses*).
 - e. 女性に対し, 性的な意味で (*kellegi seksuaalselt kasutamise kohta*)
 - f. 受動過去分詞の形容詞化: 中古の (***pruugitud*** *tarvitusel olnud, tarvitatud, kantud, kulunud*).

(1) Ma ei *pruugi* täna tööle minna. [EKS]
1sg.NOM NEG NEED today work.ALL go.INF

「私は今日仕事に行かなくてよい」

(2a) Eestlased *pruugivad* palju kohvi. [EKS]
Estonian.pl.NOM USE.3pl lots_of coffee.PAR

「エストニア人はコーヒーをたくさん飲む」

(2b) Tütar *pruugib* juba huulepulka. [EKS]
daughter.NOM USE.3sg already lipstick.PAR

「娘はもう口紅を使う」

(2c) Madrused *pruugivad* väänatud keelt. [EKS]
sailor.pl.NOM USE.3pl accented language.PAR

「水夫たちは訛りのあることばを使う」

(2d) Ta *pruugib* su usaldust kurjasti. [EKS]
3sg.NOM USE.3sg 2sg.GEN trust.PAR maliciously

「彼(女)はあなたの信頼を悪用している」

語義1では、動詞(不定詞形)が補語となり、語義2では、名詞(分格形)が補語となる点が、2つの用法を区別する、もっとも際だった統語的な特徴である。

2. 言語資料

エストニアの日刊紙 *Postimees* (インターネット版)の1999年の全記事(タルト大学コンピュータ言語学グループ編纂; 約636万語)。この言語資料は、タルト大学コンピュータ言語学グループが開発したエストニア語の形態素解析プログラム *Estmorf* により形態解析を施して利用。このコーパス(「新聞記事コーパス」)の用例には、出典として [PM] を付す。

補足的な言語資料として、エストニア憲法制定会議議事録 (Asutawa Kogu protokollid, 1919-1920) の電子版(発表者が作成【注2】; 約 193 万語)。このコーパス(「議事録コーパス」)の用例には、出典として [AK] を付す。および、タルト大学コンピュータ言語学グループが編纂した 20 世紀後半の文学的テキストのコーパス(約 405 万語)。

3. データの抽出

『新聞記事コーパス』から、動詞 *pruukima* の活用形の用例をすべて抽出した。抽出した用例のうち、動詞 *pruukima* が、否定小詞 *ei*, 否定接続詞 *ega*, 否定動詞 *pole* のいずれかと共起しているものを否定的文脈における用例とし、残った用例から、受動過去分詞の形容詞化した用法(2f)を除外したものを、肯定的文脈における用例とした。ついで、否定的文脈、肯定的文脈の用例のそれぞれで、語義 1 と語義 2 への分類を行った。以上の方法で得られた動詞 *pruukima* のカテゴリごとの用例数の集計が、表 1 である。なお、受動過去分詞の形容詞化した用例は、動詞としての用法とは考えない。

| | 語義 1 | 語義 2 | 合計 |
|--------|-------|------|-------|
| 肯定的文脈 | 15 | 50 | 65 |
| 否定的文脈 | 574 | 13 | 587 |
| 合計 | 589 | 63 | 652 |
| (形容詞化) | — | (19) | (19) |
| 総計 | (589) | (82) | (671) |

表 1: 新聞記事

否定的文脈に現れる *pruukima* の全用例を、否定要素ごとに分類・集計したものが、表 2 である。

| 否定要素 | 語義 1 | 語義 2 | 合計 |
|---------------|------|------|-----|
| <i>ei</i> | 567 | 5 | 572 |
| <i>poleks</i> | 2 | 0 | 2 |
| <i>ega</i> | 5 | 2 | 7 |
| その他 | 0 | 6 | 6 |
| 合計 | 574 | 13 | 587 |

表 2: 新聞記事

ここで「その他」とは、例文(3)のように、モダリティを表す動詞の補語として *pruukida* が用いられ、前者が否定形である用例である。このカテゴリに語義 1 の用例がないのは、語義 1 自身がモダリティを表す用法であるためと考えられる。このことについては、第 5 節で再論する。

- (3) [...] *avalikes kohtades ei tohi alkoholi pruukida.* [PM]
public.pl.INE place.pl.INE NEG may alcohol.PAR USE.INF
「公共の場所では酒を飲んではならない」

4. 動詞 *pruukima* と否定極性(negative polarity)

表 1 が示すように、動詞 *pruukima* の語義 1 (動詞の不定詞形を補語とする用法)の用例の 97.5% (574/589)は、否定的文脈に現れている。第 1 節の冒頭で引用した『詳解辞典』は、動詞 *pruukima* の語義 1 の用法に、いわゆる否定極性があることについて明示的に述べていない。

新聞記事コーパスのデータによれば、『詳解辞典』で語義1の説明に使われている4つの同義表現のうち、否定的文脈で用いられる傾向が高いのは、単純動詞 *tarvitsema*「必要だ」(73例中50例)と熟語動詞 *mõtet olema*「～する意義がある」(724例中599例)の2つである。【注3】

『詳解辞典』は、語義1の用例として、否定小詞 *ei* と共起しているもの13例、限定を表す副詞 *vaid*「～だけ」が共起しているもの2例、非人称の肯定文1例をあげている。これは、用例のバランスとしては順当と思われる。新聞記事コーパスのデータでは、否定要素が共起していない用例15例のうち、限定を表す副詞 *vaid* ないし *ainult*「～だけ」と共起している用例が6例ある(このタイプの用例については第6節で再論する)。この種の限定表現の共起、疑問文、条件節なども、否定極性の環境に含めて考えるのがふつうである。

5. モダリティを表す動詞としての *pruukima*

第3節の終わりの例文(3)に関する議論で、動詞 *pruukima* が、語義1(動詞の不定詞形を補語とする用法)で、他のモダリティを表す動詞の補語となっている用例が新聞記事コーパスになかったことにふれ、その理由を、語義1がモダリティを表す用法であるためであると考えた。

動詞 *pruukima* の語義1がモダリティを表す用法になっていると考えられる理由はほかにもある。所有文(4a)、結果文(4b)は、それぞれ、*pruukima* のない所有文(5a)、結果文(5b)と対応するが、所有文は動詞 *olema*「ある」の用法、結果文は動詞 *tulema*「来る」の用法であるから、(4a)(4b)における *pruukima* の役割は、(5a)(5b)の表す内容にモダリティを付与することと考えられる。

- (4a) *Mõistel “püha” ei pruugi enam olla religiooset tausta. [PM]*
 notion.ADE sacred NEG NEED any_more be.INF religious.PAR background.PAR
 「『聖なる』という概念には、もはや宗教的背景があるとはかぎらない」
- (4b) *Minu kavast [...] ei pruugi midagi välja tulla. [PM]*
 1sg.GEN plan.ELA NEG NEED anything.PAR out come.INF
 「私の計画は実りをもたらしそうにない」
- (5a) *Mõistel “püha” ei ole enam religiooset tausta. [作例]*
 notion.ADE sacred NEG be any_more religious.PAR background.PAR
 「『聖なる』という概念には、もはや宗教的背景がない」
- (5b) *Minu kavast ei tule midagi välja. [作例]*
 1sg.GEN plan.ELA NEG come anything.PAR out
 「私の計画は実りをもたらさない」

6. ドイツ語の動詞 *brauchen* との用法上の類似

Lenz (1996:393ff.)によれば、現代標準ドイツ語の *brauchen* の用法は、(対格または属格の)名詞句を補語とする用法と、不定詞を補語とし、ふつう否定的文脈で用いられる法動詞(Modalverb)相当の用法とに大きく分かれる。

- (6a) *Ich brauche einen Regenschirm. (Lenz 1996:393)*
 「私は雨がさが必要だ」
- (6b) *Sie braucht nicht nach Köln zu fahren. (Lenz 1996:404)*
 「彼女はケルンへ出かける必要はない」

Lenz(1996: 398)は、また、現代標準ドイツ語の *brauchen* の法動詞としての用法のうち、*nur, bloß* などの限定する副詞と共起する(7)のような用法も否定的文脈に含めている。

- (7) *Du brauchst nur drei Schritte zu gehen. (Lenz 1996: 398)*
 「あなたは3歩あるだけでいい」

エストニア語の *pruukima* は、不定詞を補語とする用法がほとんど否定的文脈に現れているということを含め、その用法が標準ドイツ語の *brauchen* の用法ときわめてよく似ている。なお、用例(7)に相当する用法は、第4節でふれたように、『詳解辞典』に2例、コーパスのデータには6例の用例がある(用例(8)参照)。もし、ドイツ語の文法学者にならぬ、また、否定極性の一般的な定義にしたがい、限定する副詞と共起する用法を、否定要素と共起する用法に含めて考えるなら、コーパスのデータでは、エストニア語の動詞 *pruukima* の語義1(動詞の不定詞形を補語とする用法)の肯定的文脈における用例は、15例からさらに減って、9例だけになる。

- (8) Pärast paari päeva pruukis vaid kellelgi hüüda [...] [PM]
 after pair.PAR day.PAR NEED.PAST.3sg merely someone.ADE shout.INF
 「二日くらいたつと、誰かが叫ぶだけでよかった」

7. まとめと今後の展望

エストニア語の動詞 *pruukima* の2つの語義・用法は、語義1は、動詞の不定詞を補語としてとり、否定極性があるのに対し、語義2は、名詞の分格形を補語としてとり、否定極性は見られない、という統語的・意味的なはっきりとした違いによって区別される。また、語義1の用法が、モダリティを表す動詞形式であることを示す十分な根拠がある。

『エストニア語文語詳解辞典』は、このきわだった区別に関する明示的な指摘がない。動詞 *pruukima* が、語義1ではもっぱら不定詞とともに用いられることは、辞書として明確に述べた方がいい。なお、語義1の説明に用いられている、ほぼ同義に見える4つの動詞表現【注4】のうち、結合動詞 *vaja olema* には、動詞の不定詞形のほかに、名詞の分格形を補語としてとる用法【注5】があり、また、熟語動詞 *mõtet olema* には、動詞の不定詞形の補語をとれない用法(所有文から派生したと考えられる接格構文)があって、いずれも *pruukima* の語義1の説明には無条件で使えない類語表現である。

- (9) Mul oli vaja aega, [...] [PM]
 1sg.ADE be.PAST.3sg necessary time.PAR
 「私には時間が必要だった」
- (10) Võrumaa taasühinemisel on mõtet [PM]
 Võru_Province.GEN reunification.ADE be.3sg thought.PAR
 「ヴォル地方の再統合には(実現すべき)価値がある」

動詞 *pruukima* の語義2(名詞の分格形を補語にとる用法)については、本発表ではほとんど扱わなかった。『詳解辞典』における、動詞 *pruukima* の語義2の意味の下位区分に関しては、たとえば、認知意味論的な動機付けができそうな可能性があるが、本発表では試みない。

エストニア語の動詞 *pruukima* は、中期低地ドイツ語の動詞 *brüken* が借用されたものとされる(Mägiste 2000: 2185)。この中期低地ドイツ語の動詞と同起源の現代標準ドイツ語の動詞は *brauchen* である。しかし、中期低地ドイツ語は、現在の標準ドイツ語に直接つながる言語形態ではない。初版が1969年に出た Wiedemann の辞典(本研究では1893版の復刻版 (Wiedemann 1973) を利用)によれば、当時の *pruukima* には、現在と同じく、名詞補語を伴う用法と動詞の不定詞形を伴う用法があり、名詞補語を伴う用法は、ドイツ語の動詞 *gebrauchen*, *brauchen*, *verbrauchen* を使って説明されているところから、『詳解辞典』の語義2の用法とほぼ同じだったと推定される。しかし、動詞の不定詞形を伴う用法は、ドイツ語の *pflegen*, *gewohnt sein* を使って説明されており、また用例として引かれている例文(11)から考えても、現在のようなモダリティを表す用法だったとは考えにくい。

- (11) kann, kust ta prükis jūa [WED]
 jug.NOM REL.ELA 3sg.NOM be_used_to.PAST.3sg drink.INF
 「彼がいつも飲んでいたジョッキ(die Kanne, aus welcher er zu trinken pflegte)」

これに対し、1920年ころのエストニア語の言語資料である「議事録コーパス」における動詞 *pruukima* の用例を抽出し、動詞の不定詞を補語とする用法を調べてみると、現在と同じく、モダリティを表す用法と考えることができるだけでなく(例文(12a)(12b)参照)、カテゴリーごとの用例数の内訳(表3)も「新聞記事コーパス」のもの(表1)にきわめて近い。

- (12a) Meie ei pruugi kaugemale minna, [...] [AK] (人称構文)
 1pl.NOM NEG NEED farther go.INF
 「われわれはこれ以上先に進む必要はない」
- (12b) Meil ei pruugi sugugi karta, [...] [AK] (非人称構文)
 1pl.ADE NEG NEED at_all fear.INF
 「われわれはまったく恐れる必要はない」

| | 語義 1 | 語義 2 | 合計 |
|-------|------|------|-----|
| 肯定的文脈 | 6 | 9 | 15 |
| 否定的文脈 | 220 | 4 | 224 |
| 合計 | 226 | 13 | 239 |

表3: 議事録

エストニア語の *pruukima* と標準ドイツ語の *brauchen* の意味・用法が酷似している事実は、対照言語学的にも、言語史的にも興味深い。「議事録コーパス」のデータからは、動詞 *pruukima* は、すでに1910年代には現在のように用いられていたと考えられる。

本研究では、「新聞記事コーパス」と「議事録コーパス」という限定されたジャンルの言語資料を解析の対象として、エストニア語の動詞 *pruukima* の多義性を解明しようと試みた。今後の研究の方向としては、異なったジャンルの言語資料を解析した場合にどのような結果が得られるかを見るのも興味深い。

たとえば、20世紀後半の文学的テキストのコーパスにおける動詞 *pruukima* の用例を表1、表3にならって分類・集計すると、表1とよく似た結果が得られる。なお、肯定的文脈における語義1の用例21のうち、18例は *vaid* または *ainult* 「～だけ」と共起している。

| | 語義 1 | 語義 2 | 合計 |
|-------|------|------|-----|
| 肯定的文脈 | 21 | 53 | 74 |
| 否定的文脈 | 275 | 13 | 288 |
| 合計 | 296 | 66 | 362 |

表4: 文学的テキスト

さらに、もし将来、過去百数十年のエストニア語の歴史的なコーパスが整備されれば、動詞 *pruukima* の不定詞を伴う用法の発達の歴史がより精密に解明できるようになると期待される。

注

* 本研究発表は、科学研究費補助金・基盤研究 (A)「ロシアおよびその周辺の少数言語のコーパスの構築と記述的・歴史的研究」[研究代表者 松村一登, 課題番号 18202010] の研究成果の一部である。

【1】本稿で引用したエストニア語の用例において用いている略語は以下の通り。

《用例の出典》

| | | | |
|----|----------|-----|--------------------------|
| AK | 議事録コーパス | EKS | エストニア語文語詳解辞典 |
| PM | 新聞記事コーパス | WED | Wiedemann のエストニア語・ドイツ語辞典 |

《語釈中の略語》

| | | | | | |
|-----|-----------------|------|----------------|------|--------------|
| ADE | 接格(adessive) | ALL | 向格(allative) | ELA | 出格(elative) |
| GEN | 属格(genitive) | ILL | 入格(illative) | INE | 内格(inessive) |
| INF | 不定詞(infinitive) | NEED | pruukima の語義 1 | NEG | 否定を表す要素 |
| NOM | 主格(nominative) | PAR | 分格(partitive) | PAST | 過去 |
| REL | 関係詞 | USE | pruukima の語義 2 | | |
| pl | 複数 | 1sg | 1 人称単数 | 1pl | 1 人称複数 |
| 3sg | 3 人称単数 | 3pl | 3 人称複数 | | |

【2】このコーパスの作成に当たっては、日本で、原資料をマクロ撮影し、デジタルスキャニングした画像を、エストニア国立図書館(Eesti Rahvusraamatukogu)に送り、OCR(光学的文字認識)により文字化した。誤認識の校正、および、テキスト整形の基礎作業(発言者を表す箇所や形式段落の切れ目への印付け等)は、現地のエストニア人と松村の共同作業として、最終段階の well-formed な XML 文書への変換は、松村が単独で Perl 言語のスクリプトを書いて行った。OCR の作業を快く請け負ってくれた、エストニア国立図書館の関係者に感謝する。

【3】エストニア語の標準文法は、文の動詞成分をその形態と統語的性格によって、複合動詞(liitverb)、結合動詞(ühendverb)、熟語動詞(väljendverb)などに分類する(Erelt et al. 1993: 20-22)。結合動詞は、単純動詞と副詞的小詞(adverbial particle)ないし側置詞(adposition)の結合したもので、ドイツ語の文献では Partikelverb と呼ばれる。エストニア語文法の ühendverb と väljendverb という名称は、英訳すると、英語の文法でいう phrasal verb (e.g., *pick up*) や prepositional verb (e.g., *look at*) という名称と (cf. Biber et al. 1999: 403-404) とずれてしまうので要注意。

【4】エストニア語には、動詞の不定詞形が2つあり、pruukima の補語として現れる不定詞は、da 不定詞と呼ばれる。4つの動詞表現の中で pidama だけは、da 不定詞ではなく、もう1つの不定詞形である ma 不定詞を補語として要求する点で、類義表現ではあるが、pruukima とは補語となる不定詞の形態を異にしている。本発表では、この点は 詳しく論じない。

【5】結合動詞 vaja olema がつくる、この構文に現れる分格名詞句を(副詞的)小詞 vaja の要求する補語とみなす考え方が、エストニア語の標準文法では定着している。

参考文献

- Biber, Douglas et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman.
- Eesti kirjakeele seletussõnaraamat. Tallinn, Estonia: Eesti Keele Sihtasutus, 1988-2007. [EKS]
- Erelt, Matti et al. 1993. *Eesti Keele Grammatika II. Süntaks*. Tallinn, Estonia: ETA Keele ja Kirjanduse Instituut.
- Lenz, Barbara 1996. Wie *brauchen* ins deutsche Modalverb-System geriet und welche Rolle es darin spielt. *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 118: 393-422.
- Mägiste, Julius 2000. *Estnisches etymologisches Wörterbuch*. 2. Auflage. Helsinki, Finland: Suomalais-Ugrilainen Seura. [1983¹]
- Wiedemann, Ferdinand Johann 1973. *Estnisch-deutsches Wörterbuch*. 4. Druck. Tallinn, Estonia: Valgus. [1869¹; 1893², 1923³] [WED]